

令和元年度(平成31年度)「すくすく泉」事業 実績報告書

(団体名：NPO 法人 いずみの会)

【事業名称】
「すくすく泉」 子育てひろば事業・一時預かり事業・小規模保育事業
【事業目的】
<ul style="list-style-type: none">・ 保育・ひろば(一時預かりを含む)を2本柱として、地域子どもたちが地域みんなに愛されて育つ場をつくれます。・ 樹木に囲まれた自然空間や泉文庫の豊富な絵本等の蔵書を活かして子どもの感性を育み、そこで過ごす子どもにとって、楽しく豊かな原風景となる場をつくれます。・ 地域の中の多世代の交流を大切に、子育てを通してみんなが豊かな時を過ごし、子育ての不安感、負担感、孤立感を軽減し、相談しやすく、様々な子育て情報を得られる場をつくれます。
【事業内容】
<p>【子育てひろば事業】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 乳幼児親子の日常的な居場所として、育児不安の支えとして、地域とのつながりの入り口として、誰もがホッとする心地のいい場をつくった。・ 双子、低月齢、特別な配慮が必要な子、転居間もない親子、外国人の親、祖父母育児、など、さまざまな育児のスタイルがあり、それぞれの抱える不安がある。どんな親子にも寛容な場であり、気軽に来てホッとでき、安心して子育てをすることで、心も体も健やかな子どもが育つ場をつくった。・ 発達に不安があり、育てにくさを感じている親を、周囲に理解してもらうための取り組みをした。・ 手作りや木の温かみのあるおもちゃで遊び、いずみ文庫でいい絵本に触れ、隣接の公園でのびのび外遊びをし、自然を身近に感じるなど、子どもたちが安全に楽しく過ごし、みんなで育つ場をつくった。・ 親同士の自然な出会いや支え合いができるようなはたらきかけをし、孤立子育てからの脱却、共に支えあう子育てを促した。・ 定期プログラムに加え、利用者のニーズに合わせた催しを、専門機関とのネットワークにより実現させた。・ 地域情報がワンストップで手に入る、また、利用者のニーズに合わせて紹介し地域へつなぐ。内容によっては専門機関へつなぐ役割を持った。

【一時預かり事業】

- ・ 保護者の育児に伴う精神的および身体的負担の軽減のため、理由を問わない一時的な預かり保育を行った。（1～6 時間、0 歳は～4 時間）事情により緊急な預かりにも対応し、近くに頼る所の無い保護者の支えとなった。
- ・ 以下の 3 点を重要な骨組みとした考えは一貫して変わらない。
 - * 命を守り無事にお返しする。
 - * 安心して保護者を待てるような子どもの心の安定。
 - * 安心して子どもと離れていられるような保護者からの信頼。
- ・ 事前に面接や聴き取りをして登録をし、当日にも子どもの情報を聴き取り、安全安心な預りを目指してきた。ひろばの親子の中で、慣れない子どもを預かることから、その子、その子に合わせた預かりを丁寧に行った。
- ・ 担当スタッフが交代した時や、しばらく期間が空いての預かりもスムーズに行えるよう、情報を共有し、記録を残している。

【小規模保育事業】

- ・ 保育の基本理念、基本方針および保育目標（めざす子ども像）を柱とした保育をした。

保育の基本理念基本方針

- * 一人ひとりの子どもを愛し、尊重します。
子どもが最善の利益とその権利を尊重され、心身共に健康で、未来を創造する基礎が育つよう、チームワークを活かして保育する。
- * 乳幼児期を豊かにするために家庭と連携します。
人間性の土台が育つ大事な時期として、それを十分認識して子育ての喜びを共有し、乳幼児期を豊かに生きるために保育者と保護者が連携していく。
- * 地域から生まれ、子どもをまん中に地域が支え合う関係づくりをめざします
地域の自然や様々な物的・人的資源、文化を保育に活かします。また、子育てを通して多世代がつながりを深める拠点となり、地域全体の福祉や家庭支援に寄与していきます

保育目標

- * 自分が好き、みんなが好きなこども
- * 心も体も健やかな子ども
- ・ 子ども一人ひとりの保育を通して、心と身体の成長発達を保障し、家庭との連携を密にとることで、子育てを共に楽しみ、支えられるようにしてきた。特に、配慮が必要な子どもが 2 名いたことで、スタッフが障害児に関するキャリアアップ研修をはじめ様々な研修に参加し、子どもの読み取りや個のニーズにあったかかわり方と全体の子どもの育ちの両立、スタッフの体制づくりに苦闘した 1 年だった。ハビットの巡回や、すくすく泉のアドバイザーの先生に相談しながら、家庭支援も平行して進めていった。
- ・ 園の内外での研修の機会を多く持った。
- ・ 近隣の園や妊婦さん、中学生など地域の様々な人とのかかわりを広げたまちの保育園吉祥寺と精華第一保育園との合同研修の 3～4 回目を開催した。今年から連携した武蔵野赤十字保育園からも参加があり、参加はなかったが近隣のマミーぽぷら保育園にも声をかけてみた。
- ・ 保育室の仕事内容のマニュアルを見直し、働きやすい環境を作った。

【事業効果・波及効果】

【子育てひろば事業】

今年度は主に、「多様な子育てを応援する」、「ひろばをさらに居心地の良い場所にする」、「子育て支援における他機関との連携を充実させる」について意識しながら進めてきた。

「多様な子育てを応援する」

- ・外国人の利用は今までも自然に対応してきたが、公園に来ていた外国人の親子に声をかけたことで、情報提供のサポートができた。
- ・発達障害の子を持つ母親によるお話会を開催。当事者の思いや体験を、広く聴いてもらい、相互理解のきっかけをつくった。実際に不安があるが誰にも相談できなかった人、サポートしたくても分からないので触れられなかった人などから多くの反響があった。このプログラムは、全市へ波及可能で、実際に 0123 吉祥寺で開催が決まった。ひろばに来たくても来られない親子が近くにいることを知ってもらい、本当の意味での支え合い子育てを目指したいと思う。

「ひろばをさらに居心地の良い場所にする」

- ・スタッフがひろばの状況を読み取り、自然に存在し、知り得たことを日々情報交換するようにしたことで、より親しみをもち、家庭の延長のようにつづり、ときには甘えられる場所になってきた。それによって自然に空気が変わったのか、特定の近寄りたがりグループもできず、孤立する様子もほぼ見なくなった。利用者同士の自然な交流がみられ、初めて来た親子もうまく受け入れてくれている。

「子育て支援における他機関との連携を充実させる」

- ・今までひろばの利用者登録をしていなかったが、初来所の親子の記録簿をつけるようになった。スタッフ間の情報共有のみならず、リピーター以外でもどのような親子がここに立ち寄ってくれたか、どのような様子だったかなどの把握が、他機関（子ども家庭支援センター等）との連携を充実させることにつながる。

ネットワーク会議参加などを通じて他機関の方たちと顔の見える関係をつくり、実際の動きにつなげていきたい。

今年度は新たに、市の保育コンシェルジュをすくすく泉に招き、保活の基礎知識をレクチャーしてもらった。やっておくべきことが分からず不安、最初から保育園はあきらめていた、などの声をひろばでキャッチしたことから、実現までできた。時期の問題などの課題はあるが、次に活かしたい。

さらに今後、健康課のこうのとりの学級（妊婦両親学級）への子育て支援拠点のかかわりの実現へ向けて協力をしていきたい。

- ・毎週続けてきたママ部活「もしものいずみちゃん」の活動から、今年度は、防災食づくりのイベントを実現。ビニール袋でつくるご飯やパスタ、缶詰を使用して実際に子どもが食べてくれるかも試してみたいという参加者の意見で企画した。市の防災課の協力で炊き出し用のアルファ化米もつくって食べてみた。こちらは父親たちも加わり共同作業をした。楽しく学べるイベントになった。
- ・その他、月に 2 回の「こらぼの」（中町集会所 こらぼのコミセン親子ひろば）を運営。親子が過ごす場の選択肢を増やす効果が出ている。＜遊びながら学べる講座＞の企画も継続。日時が決まっているため、初めての親子が参加しやすく、こらぼのから常設のひろばへという利用者も少なくない。
- ・新型コロナウイルスの感染拡大防止対策として、3 月は開所日 0 日となった。突然日常を奪われた利用者の戸惑いと不安に、いずみのひろばとしてできることとして、「いずみのハト時計」を行った。「いずみのハト時計」雨天以外の毎日 11 時に公園側の門を開け、デッキを舞台にして、手遊び歌、紙芝居、絵本の読み聞かせ、人形劇などをする。一時預かりの子どもを対象だが、公園に遊びに来ている親子も自然に参加できるようにした。約 10 分。公園にバラバラにきていた親子が少しのコミュニケーションをとことで、不安感や孤立感を和らげる。
- ・緊急事態宣言後、Twitter に親子で過ごすためのヒントをアップ。スタッフが自宅で動画を撮影。遊びやおやつなどの「小ネタ」をほぼ毎日提供。

- ・ 境おやこひろばの企画した ZOOM を利用したオンライン親子ひろばに参加。閉所以来会えなくなっていたすすきと泉利用者の参加もあった。

【一時預かり事業】

- ・ 今年度は、スタッフ間の連携を重視し、1 対 1 担当からの脱却。ひろばスタッフも含めたフォーメーションの考え方に取り組んだ。お互いに声掛けをしながらサポートし合うことを目指した。
- ・ 10 月より、ひろばスタッフと一時預かりのスタッフを数名交代した。同じ場にいながら役割が違ふことでおこる視点の違いを理解し合い、コミュニケーションを今まで以上にしやすい体制を目指す。それにより、ひろば・一時預かり両方の質を上げていくことができると考えている。
- ・ 以上の改変により、ひろばの空気感が一体化し、預かりの子どももひろば利用親子たちと関わりながら、より安心して楽しく過ごすことができている。子どもが安心して楽しんで過ごせるということは、預ける保護者の不安や罪悪感を払拭し、心のハードルを下げ、より利用しやすくなるという効果がある。
- ・ 食事、睡眠、排泄など、保護者と情報共有しながら、子どもの発達や生活に合わせた対応を心掛けてきた。預かり中の報告、預かった物の管理なども信頼を得るポイントとして大切にしている。
- ・ シフト組担当が各スタッフの限界を把握し、スタッフの勤務時間の長さを調整。また、活動量の多い子や、配慮が必要な子の場合は、途中交代のシフトを組むなど、シフトの工夫により、スタッフの負担感を減らし、それにより、丁寧な対応、子どもと笑顔で寄り添うことを実現させている。「子ども自身が、すすきと泉に預けてくれと言う」という笑い話がよく聞かれる一時預かりになっている。
- ・ 全体研修や、外部研修により、スキルアップを促してきた中で、保育士資格取得するスタッフ（今年度 1 名増えた）、発達障害のサポートをする資格を取得するスタッフなど、自ら知識や経験を積む者が出てきたことが頼もしい。

【小規模保育事業】

○保育者間の大事にしたいことの微妙なズレをすり合わせることに重点的に取り組んできた。

- ・ 『よみとってみたら』というテーマで、保育者の気持ち動く場面を切り取って事例を出し合った。4 月の研修で学んだ視点が強化され、みんなで具体的な場面を通して共有してきた。本音を出して話せるようになってきたので、今後の引き続きの課題である。
- ・ 配慮が必要な子どもの保育が、保育者の学びの意欲を引き出した。研修から学んだことで、きめ細かな読み取り、ニーズに合わせた保育方法の工夫、柔軟な価値観をもち保育を見直す、などの効果があった。

○中学生、妊婦さん、ひろば親子、近隣の園など地域とのかかわりをひろげ、ひろばとの連携プログラムの可能性が見えた。

- ・ 今年度初めての試みとして、中学生の職場体験 5 名を受け入れた。子どもたちが初めて会うお姉さんに接する中で人との距離を縮めて仲良くなっていく過程やお姉さんの気持ちを察して遊んであげる、大好きになるなど貴重な出会いとなった。
- ・ 育児の不安や負担を軽減するための保育所体験・赤ちゃん体験は 2 年目だった。妊婦さんや赤ちゃんを育児中の保護者を対象にひろばで広報できること、1 回だけでなくひろばにつながれることが良かった。
- ・ 3 園合同の研修会では近隣の保育園にも声をかけた。更に範囲をひろげて近隣の園との連携を深める 1 歩になった。

○運営委員会や保護者アンケートから、保護者との連携を工夫した。

【達成目標に対する評価・反省】

1年間大きな事故やケガ苦情もなく運営できた。以下はプロポーザルでかかげた5年間の目標に対して達成できたことである。

また、今年度は非常勤職員の有給休暇制度の開始、最低賃金引上げに伴う賃金改定を行いよりよい職場環境をめざした。

●3 事業の連携で質を高める

事業をまたいだスタッフの異動をした。

中学生の職場体験、クリスマス会を連携して行った。

保育室が企画した『保育所体験・赤ちゃん触れ合い体験』や『保育園見学』に参加した親子をひろばにつないでいった。

合同の避難訓練をした。

●多様な子育てに対応できる施設にする

発達障がいの子どもを育てている母親のおはなし会をして利用者同士で考える機会をつくった。

保育室に要配慮児がいたこともきっかけとなり、スタッフが外部研修、内部研修で学ぶことに特に力を入れた。

父親の育児参加として今まで行ってきたパパ講座に加えて、外遊びの会を実施した。

●切れ目のない支援の一翼を担う

定期的に計測に来てもらっている助産師さんたちを通して、ひろばを紹介してもらうことができ、低月齢の0歳児や、サポートが必要な親子がひろばにつながることもできた。

妊婦さんや低月齢の0歳児を持つ母親を対象にした『保育所体験・赤ちゃんふれあい体験』など、セーフティネットに早い段階からのせていくようなプログラムを実施した。

公園に遊びに来ている小中学生の見守り、中学生の職場体験の受け入れなどを通して、乳幼児に限定せず、地域の子どもたちを支える姿勢を大事にしてきた。

●地域全体で子育てするための連携

民生委員さんのコーラス、昔遊びカフェ、井之頭祭りの赤ちゃんの休憩所開設、吉西コミセン祭りの親子ひろば開設などの恒例行事に加え、地域のお祭りで山車のコースにあたる施設前の公園でお菓子のふるまい、高齢者施設にて若者の太鼓演奏の企画をした。

●支援者同士の連携

3園合同研修会に武蔵野赤十字保育園や八丁ハナミズキ保育園など近隣の園も参加して、地域の保育園が連携していく輪が広がってきている。

●運営体制の安定化と次世代へのつなぎ

今年度、新たに2名の非常勤スタッフが保育士資格をとった。

常勤保育士の雇用に関しては、難しいが人材紹介会社の利用も視野に入れて実現にむけて動いている。

●安全面の確保

玄関スロープから車道への飛び出し防止の柵ができ、保護者の心理的不安が軽減された。

保育デッキから直接公園に出られる門が設置され、いろいろな想定に対応する避難経路が確保された。

●その他反省は以下の点である

- ・内部からも外部からも常勤の保育士が確保できずにいる。
- ・大きな額の補助金が入るのか入らないのか年度の終わりまでわからないこともあり、運営に生かすのが難しかった。
- ・玄関スロープの屋根がなく、雨でベビーカーが濡れることが何度もある。気づけばビニールを被せるのだが、急な場合や、ひろば時間外の一時預かりのベビーカーなどに間に合わず濡らしてしまった。
- ・一時預かりのお弁当の取り違いがあった。名札をつけて管理をしていたが、スタッフがそれをきちんと確認せず、似たような名前の別の子のものを食べさせてしまった。両保護者に説明と謝罪をし解決したが、場合によっては命に係わるミスのため、ミーティングで改めて注意喚起と今後二度とないような方法をとる。(食べさせる前に名札の読み上げをする等)

【令和２年度以降の見通し】

【子育てひろば事業】及び【一時預かり事業】

- ・ひろばに来たくても来られない、発達に不安がある子とその保護者の存在を知ったので、そのための定期プログラムを実施。そこから自然にひろばへつながることを期待している。
- ・父親の育児参加のための企画をさらに進め、父親同士のなかまづくりのきっかけを加えたプログラムを企画する。
- ・保育コンシェルジュや健康課、保健師、助産師会、市内子育てひろば拠点などと連携をさらに深め、具体的に利用者還元できるようにしたい。
- ・子育てひろばネットワーク東地区の連携を深め、コラボによる講座やイベント、合同職員研修などを各団体に提案したい。
- ・地域の力を活かす場面を増やしていきたい。特に大学生など若者の参加も機会を増やしたい。
- ・スタッフの質向上について、全体研修、ミーティングを続けていくほか、関連資格の取得を促すなどして多方面の専門性を引き続き高めていく。
- ・年度スタートが臨時閉所という状況ではあるが、今やっておけること、この状況での子育て支援の可能性を検討して、前向きに進めていきたい。

【小規模保育事業】

- ・保育の安定と今後の運営継続のために、保育士の資格取得をすすめ、常勤保育士の雇用を実現する。更に雇用できた場合の受け入れ態勢をしっかりと作っていく。平行して現在のスタッフが保育の中心の役割を担えるようにスキルアップしていく。
- ・引き続き、保育の中で大事にしたいことを共有していくために、日々の保育やミーティングや研修を通して本音で話し合うことを大事にしていく。キャリアアップの研修や市主催の全体研修など外部に自ら学びに行く機会を作っていく。
- ・中高生対象の職場体験、『保育所体験・赤ちゃん体験』、近隣の園など、ひろばと連携しながら、内容の充実をはかりたい。近隣の園とは、合同研修会などを通して、子育てを共に学び合う関係づくりをしたい。